

第4回 安曇野市文化財保存活用地域計画策定協議会

1	協議会名	安曇野市文化財保存活用地域計画策定協議会
2	日 時	令和6年12月13日（金） 午前9時30分から11時30分まで
3	会 場	安曇野市役所本庁舎 307共用会議室
4	出席者	笹本正治会長、梅干野成央副会長、曾根原秀明委員、幅谷啓子委員、山根宏文委員（リモート参加）、大澤慶哲委員、加藏友美委員、佐藤亜紀子委員、馬場伸一郎委員代理
5	市側出席者	文化課長 三澤新弥、文化財保護係長 堀久士、文化財保護係 斉藤雄太、山下泰永 支援事業受託者（株式会社KRCあづみの事業所）環境計画室長 藤村忠志、環境計画室 長尾山音
6	公開・非公開の別	公開
7	傍聴人 1人	記者 0人
8	会議概要作成年月日	令和7年1月8日

【発言要旨】

- 1 開会
- 2 あいさつ（会長）
- 3 議事
 - （1）ワークショップ実施結果の報告（資料1）

【事務局より資料の説明】

会 長：10月、11月に3回ワークショップを行った。拾ヶ堰のある堀金地域の中堀地区。古くから湧水を利用してきた穂高地域の等々力地区。さらには古くから存在しながら、現在は非常に危機的な状況になっている明科地域潮沢地区の名九鬼集落。それぞれ特徴があり、場所の選び方もよかったと思う。参加した人たちは満足していると思うが、参加者が少ないと感じた。これを増やしていくのが私たち委員一人一人の役割である。文化財指定されているものと、皆さんが宝物と考えているものの間に大きな差があると感じる。指定されていない景観や水を、私たちはどう本計画に入れていくかという大きな課題をいただいた。

委 員：前回の会議でアンケート結果の共有をしたと思うが、私の専門は建築の歴史。アンケート結果では、文化財として建築物があまり捉えられていなかったことを残念だと思っている。風景の一部として建築物を認識しているものだと私は捉えているが、今回のワークショップの結果を拝見し、どこの回でも建築物が一つの宝物であり、かつ危機に瀕している宝物だという認識をしていただいた気がした。アンケート結果では拾えなかったものも、今回のワークショップで拾っていただけたと思う。私はワークショップに参加できなかったので、地域の認識や参加者の反応も少し教えていただきたい。

事務局：一番ショックが大きかったのは名九鬼の集落だったのでは。村社の藤城社はここ数年祭りもされてなく、本殿が傾いていたり、集落内の民家は残っているが、人の姿はなく、里山はきれいに整備されている現状。参加者の中からは「これだけきれいに整備されている家や田んぼなどはまだ復活もできるのでは」という声や、「藤城社の神楽殿を活用して芸術祭などもできるのではないか」という希望ある意見もあった。このままにしておくのはもったいないという意見は多かった。

委員：ワークショップを通じて、建築物に関する話題は出てきたという認識でよいか。

委員：私は名九鬼のワークショップに参加した。参加者には名九鬼出身の方がいた。この集落を出て60年になるとのことだった。私はどこか土足でプライベートな空間に立ち入っているような気がして、ワークショップという形ではあるが、バツの悪さのようなものを感じた。その方にどう思うか聞いてみたところ、「集落の他の方の連絡先もわからず、集落内で話し合いをする手段もない。他の方が建物を売りたいのか、守りたいのかもわからない。」とのことだった。リアルな状況を突き付けられたというのが感想だった。

会長：安曇野には古い民家がたくさんある。しかもそれは気づかれずにまわっている。一方でそれが安曇野の景観づくりに関わっている。危機的な状況だが、屋敷林を持つような大きな家にしか着目されてこなかった。風景を作っていく上で、建物をどう評価するかが大きな課題となる。名九鬼は集落そのものが機能しなくなっていく状況にあるが、この問題は明科地域のみならず、安曇野の周辺部全体に関わる問題。本計画で保存や活用ができるのかできないのか。あるいはどうあるべきなのかをまとめていかなければならない。今回のワークショップは場所の選び方も非常に良かった。参加していただいた委員もいたことも非常に重要である。

私は各地で関わっているが、実は解決策がない。しかし、解決策がなくとも、最低条件として現状を認識しておくことであるが必要。ワークショップの実施写真をみると、運営側に地元で活動的に動いて協力してくれる市民が多く写っている。これが、安曇野の力だと思っている。

（２）安曇野市文化財保存活用地域計画の内容検討（資料２、資料３）

①全体構成及び目標・方針の設定

②とりくみ（措置）及び関連文化財群の設定の方向性

【事務局より資料の説明】

会長：資料の中の「安曇野市の文化財の保存活用をとりまく状況」という記述は「安曇野をとりまく現状と課題」とし、「課題」をしっかりと意識すべきかと思う。文化庁の指導では文化観光を唱えている。点ではなく物語性を持たせよと言っている。つまり、これが関連文化財（ストーリー）の考え方。まずは、計画の構成骨子について皆さんから意見をいただき、協議したいと思う。

資料中の「安曇野市の概要」に「町村の合併による成り立ち」とある。安曇野の一番の特徴は、東筑摩郡と南安曇郡が合併したところにあるように思う。安曇野市は南安曇郡だけが意識されがちだが、なぜ明科地域に明科廃寺があったのか。キャッチフレーズの中に「２つの郡が合併してできた市」などの形でもっと強調してもよいと思った。

委員：資料中の「保存活用に関する基盤的措置」にはかなり魅力的なものを記載いただいた。今後ここに掲載されているもの以外の措置は追加されるのか。また、「関連文化財群（ストーリー）の設定と措置の例示」の表中に空欄がたくさんあるが、できれば空欄はなくしていただきたい。

「関連文化財群」に挙がっているキーワードと、「安曇野の歴史・文化の特徴」と紐づいているべき。例えば、「関連文化財群」には「信仰」、「祭礼」、「古民家」の単語が出てくるが、「安曇野の歴史・文化の特徴」にはあまり出てこない。この紐づけを

しっかり精査していただきたい。

委員：会長が言われたように、安曇野の一体感があまり強調されてないように思う。

滋賀県高島市にある針江地区では従来、家の中に水を汲み入れて生活していたが、現在は水道のある生活になった。最近NHKの番組で取り上げられてから、住民が水を汲み入れ生活用水に使う暮らしを取り戻すことをやり始めた。番組は里山についてのテーマだったが、非常に有名になり、外国からも人が多く来るようになった。計画骨子に、「現代は昔の暮らしとは変わってしまった」との記述があるが、先の例のように、もう一度見直してみることを伝えることが大事かと思う。水のある暮らしを観光で見るだけではなく、昔の暮らしの大切さを伝えることが大事である。私が旅行会社にいたならば、このワークショップの実施報告資料があれば、安曇野でツアーはいくらでも組める。安曇野を訪れるリピーターは、安曇野の暮らしや文化を知りたがっている。リピーター向けの暮らしや文化を体験できる講座等が大事なかなと思う。

石見銀山から30分のところに16haの土地と100年続いた古民家のある地域がある江津市がある。ここでは、年5軒ほど古民家を修理し、借り上げ、移住者に提供するといった事業をしている。これからの観光文化は、ただ見てもらうだけではなく、暮らしや文化を観光で体験してもらうことが本当に大事。安曇野はわさび田を観光するだけではなく、これだけのものがありながらそれを伝えられていないのは非常にもったいない。

会長：今の話の通り。文化財をどう守っていくか、活用していくかという際に観光は必須になっている。だからこそ、物語性を作っていく。事実を並べても人はあまり感動しないが、そこにストーリーが出てくるとだいぶ違ってくる。

委員：活用を考えると、やはり見てもらうことは重要だし、どう見せるかがとても重要だと思う。何度も安曇野を訪れる方は、ここにきたからこそわかる生活文化を求めている。一方で、現状はどこに行ったら見学等ができるのかを提示できる素材が少ない。

私もこのワークショップの2回目と3回目に参加した。本陣等タ力家もとても立派だが建物の中に入らず、とても残念に思った。使うことで維持する、使うからこそ活かせる、そして見せていくことを考えていきたい。

会長：資料中の「目標と方針」には過去のことしか書かれていないと感じる。これからの文化財の計画である。未来の話が欠けている。「宝物を受け継ぐ」に「育てる、創造する」を入れたらどうか。文化は常に新たに変わっていくので、維持するだけになってしまったらよくないのではないかな。観光もそうだと思う。

委員：平成の合併で明科が加わった。元は同じ安曇郡でスタートしたが、時代の途中で東筑摩郡と南安曇郡に分かれた。地理的な境目はよくわからないが、それによって生活様式が違う文化圏になり、違う文化や意識が形成されてきたのは非常に面白いと思う。どちらも全く別というわけではなく、互いにどこかで接点があって寄り添いながら、それぞれの地域で生きてきた。明科潮沢地区の名九鬼集落はもうほとんど集落として成り立っていない。一昔前、東山に住んでいる人たちは、自分たちの生活を不便で貧しいと思っていた。戦争で米が手に入らない時代、米を食べられる人たちは裕福で、いわゆる粉食の文化の所は貧しいという意識があった。そして、本来自分たちが代々つくり上げてきたものを敢えて否定するような風潮があり、高度経済成長の時代から自分たちの故郷を捨てて、都会に出るスタイルが続いている。表には出てこないこのようなストーリーをどう

扱うかが大事だと思う。潮沢地区に行くと、お年寄り「山は山ほど」とよく言う。山にいれば様々な恵みがあるという意味。江戸時代の山村の生活を調べると、とても裕福に暮らしていることがわかる。江戸時代は貨幣社会で、現金収入が山の中にはものすごくたくさんあった。それを今に復活できるかと言うと、厳しいと思うが、時代とともに価値観が変わり、生活スタイルも変わった。各地域の特徴をどう継続していくかも含めて考えていければと思う。正解はなかなかないだろうが。

会長：本計画では、安曇野市全体の文化財が対象である。ただ一方で、地域性をきちんと重視しなかったら、どこでも同じような計画になってしまう。米が重要視されるのは近代からの話。江戸時代の石高制は、米を前提に全てを考えているように見えるが、米を必ずしも食べられたわけでない。ところが、近代になると日本は米が当たり前という意識になり、それまでの文化が随分消えてしまった。例えば、山に入ってみると、家がものすごく大きく、よい材木を使っているという豊かさ。そういう視点が消えてきている。私が非常に気に入っている点は、安曇野市の皆さんにとって宝物は風景や水。これは簡単にはお金に換算できない。私たちが当たり前と思っているものに対する気づき、例えば粉物文化。それもまた物語の中に入れていけばよい。この信州ではおやきをうまく事業化したりもしている。

委員：今の議論やこの資料を拝見し、本計画は観光に結びつけていくことがゴールであると聞いて安心した。実はこの協議会を学問的な集まりかと思い、当初は違和感を持っていた。私の所有する文化財は、ポツンとあるだけなので、人がちょこっと見学して、帰っていくような場所に今はなっている。この文化財が何故ここにあるかということがきちんとまとまっていけば、よい活動になると思う。とにかく維持運営管理していくお金はないため、本計画の中で、他と関連のあるストーリーにつなげていきたいと思う。

会長：私たちにとって国重要文化財曾根原家住宅は大変重要な資産であり、国民にとっても大事なものである。なぜあの位置に曾根原家はつくられ、維持されてきたのか。ストーリー性をつくることによって、今まで守ってきた人たちの気持ちも見えてくるようなになれば、もっと活用が可能になる。今は指定等されていないが、安曇野の宝物の1つに屋敷林がある。個人の資産で維持が大変なので、敷地を売って集合住宅にするような傾向も出ている。そういう中で、私たちの大先輩として重要文化財曾根原家住宅を守ってきた委員の意見をきちんと取り上げられるようにしていかなければいけない。

委員：観光が文化の維持と保存に繋がるという話を聞いて、観光で安曇野を見に来るだけでなく、安曇野の生活に接してもらうには、外からの人たちに魅力を感じてもらうことが重要である。安曇野の魅力も一旦市から出て行った方や、市外の方たちに魅力を聞くと、もっと深まった意見がでるのではないかな。

会長：碌山美術館も国重要文化財を持っている。豊科近代美術館も彫刻で有名。ストーリーをうまく組み合わせたい。小説『安曇野』の大河ドラマ化への動きもある。30万人近い子どもたちの寄附などで出来上がった美術館を、もっと安曇野の誇りにしていけないといけない。どうしても美術館は光が当たりがちで、そうでないところにはなかなか光が当たらない傾向がある。観光等で少しでも利益を得て、文化財の保護にそれを回せるようにしていくためにはどうしたらよいか。それが本計画の骨子になってくと思う。資料では「市民の役割」が表記されていない。「文化課主体、他課と協働・連携、他課主体

への協力」の区分けは表記されている。「市民の協働」、もしくは「市民を主体にして」等の記述を入れ込み、市民全体で守っていくという区分もほしいと思った。

委員：資料中「安曇野ゆかりの先駆者近世、近代」にたくさん人名が挙げられている。頑張って読もうとしたが、正直誰だか知らない人が随分多いと感じた。可能性として、こういうところを切り捨てるのも一つの選択肢かと思う。逆に、安曇野というと今は見事な田園風景で、拾ヶ堰・稲穂がある景観を思い浮かべるが、安曇野の大地を小穴喜一先生が検土杖で、丹念に調べあげた功績は大きいと思う。検土杖が1つのキーワードになるのかもしれないと思った。先ほども発言があったが、山の中が豊かだったのは稲ではなく、養蚕やタバコ、麻など、「山の中って昔はこんなに豊かだった」ということをイラストでも交えて表現すれば、子どももわかり易いのかなと思った。

会長：博物館協議会でも「近代の偉人」について、「偉人とは誰か、誰が決めるのか」と話題になったことがある。やり方の問題で、ある程度客観視化できるような形をとりたい。是非小穴先生を偉人に入れてほしい。検土杖で安曇野全体を調べた方である。そういったものが実は大変な宝物だと思う。私たちが本当に大事にすべき人は、単に「有名な人」ではなく、考えていかなければいけない。

資料中の「目標と方針」について少し気になる。「雄大な大地からの湧水・水の恵み等様々な恵みを賢く、多彩(才)に活かし切る暮らしの文化の証が「安曇野の風景」として現在進行形で記載されている。今はそうではない気がする。生活環境が変わってしまっただけで湧水や水の恵みを本当に活かし切っているのか。現状というよりも過去形にしたほうがよいと思う。地球温暖化で従来のようなエネルギーの使い方ができなくなったり、生活の仕方が変わってくる中では、もう一度本来の活かし切るというところにもっていかないとならない。それを含め過去を認識した上で、新たな創造をしていきたいと思う。

委員：県内様々な市町村で地域計画の策定は進められているが、本協議会で一番のコアになるのは今日と次回の会議になると思う。資料中の「文化財の保存活用をとりまく状況」という課題の部分と「目標と方針」は表と裏の関係で、対応していたほうがよい。文化庁に最終案を提示した時にチェックが入るのはまさにここ。例えば、「市民の文化財等に対する関心が低い」に対して、「関心を高める」のが基本方針になると思う。文化庁の指摘には、キーワードとして「調査研究」、「保存管理」、「活用継承」が使われる。もう一度、これらの単語に沿って分類・整理をしたほうがよい。この枠組みは文化庁に本計画の素案を提出する時には、後戻りできないくらい本計画書を固定していく部分なので、今回と次回の委員会では、検討に検討を重ねた方がよい。

会長：最終的には今のよう形できちんとやっていく。今日は意見をできるだけ言っていたきたい。本計画は、文化庁の了承を最終的な目標としている。

事務局：冒頭で伝えた通り、次回協議会では更に詳しいもの、本日いただいたご指摘等を反映させたものをたたき台として用意したいと思う。

4 今後の予定ほか

【事務局より今後のスケジュールについて説明】

会長：一番の問題は市民に知られていないことをどうしていくか。計画を作っても、それが知られなかったらどうしようもない。教育委員会および本協議会でも、文化財について

の認識を高めるための措置をどうするかを計画の中に入れ、それを実行していかなければ他人任せになってしまう。次回第5回で全体像を示した上で、計画素案を第6回で練るというスケジュール。

委員：「安曇野ゆかりの先駆者」に、例えば今の安曇野を代表するわさびやニジマス、信州サーモンのような産業を切り開いた人たちを是非とりあげてほしい。

委員：「指定文化財と未指定文化財の一覧」を今後どう扱うかが大事だと思っている。文化財調査委員から意見聴取するところで終わるのか。

事務局：未指定文化財は、調査員の方からと、既往文献から把握している。本日文献から把握した一覧表は提出していないが、本日の資料は途中経過だと思っていただきたい。

委員：例えば、このメンバーからの意見聴取はしないのか。

事務局：機会として考えていなかったが、集まって聴取するとなると難しいため、随時メール等で事務局に提出いただければと思う。

委員：ダイレクトに反映させる必要はないが、精査した上で載せていただきたい。まだ、ここに挙がっていないものもあるのではないかな。

会長：指定文化財の基準等は、旧町村においては一律ではなかった。市になった時にそれをそのまま踏襲しているため、お気づきの点があったら伝えていただきたい。そして、これは決して、本計画だけの問題ではなく、将来つくられる安曇野市誌にきちんと反映されないといけないと思う。ここに挙げられた人たちを全部反映するわけではないが、ひょっとするともっと注目した方がよいのではないかという人たちをどんどん挙げてもらい、より豊かな計画が策定できるようにしたいと思う。協力をお願いしたい。それから、委員の皆さんは、周りの人たちにも、知恵はないか聞いてもらいたい。

委員：毎年安曇野市で行われている屋敷林フォーラムのこれまでの講演会をYouTubeで視聴した。例えば水、サクラについて、それから建築では古民家の魅力、また長峰山などの話があげられている。本当に、色々あってそこには深い理由や色々なものがあるため、是非ともこういうものを発信してほしい。今まで私が26年間観光に携わって唯一後悔しているのは、有名な観光地、人気のある所を理由や関係なく転々と回っていた点である。実は1つ1つに理由があり、それを知ることによって魅力は増す。先程例に挙げたように、やはり昔の人の知恵を学ぶことは非常に大切で、実は素晴らしいものがたくさんある。できたら観光協会でも発信してほしい。外から来た人にここの魅力を知ってもらうことで、地元の人たちは自信を持つことができる。これだけ魅力があることは本当に素晴らしいと思うので、それを多くの人に知ってもらうことが大事だと思う。

会長：今日皆さんからいただいた意見は非常に重要で、これから計画を作るに際して大きな糧になるものだった。